

ダニエルの書 - ナンバー・シックス

ヨヤキム

Jeff Pippenger

2023-12-01

ダニエル書とヨハネの黙示録は、聖書が旧約聖書と新約聖書から成る一冊の書物であるのと同様に、一つの書物である。

神の御子としてのイエスの生涯と死、そして復活の歴史は、旧約聖書に含まれる証拠なしには完全に立証することができない。キリストは新約と同じほど、旧約においても明らかに啓示されている。一方は来るべき救い主を証しし、もう一方は預言者たちが予告したとおりに来られた救い主を証ししている。贖いの計画を正しく理解するためには、旧約聖書の聖句を十分に理解しなければならない。預言の昔からの輝かしい光こそが、キリストの生涯と新約聖書の教えを明瞭に、そして美しく浮かび上がらせるのである。イエスの奇跡は彼の神性の証拠である。しかし、彼が世の贖い主であることの最も強い証拠は、新約の歴史と照らし合わせた旧約の預言の中に見いだされる。イエスはユダヤ人に言われた、『聖書を調べなさい。あなたがたはその中に永遠のいのちがあると思っているが、まさにそれこそがわたしについて証ししているのだ。』当時、旧約聖書以外の聖書は存在しなかったので、救い主のこの命令の意味は明白である。『預言の霊』第3巻、211頁。

キリストが誰であり、いかなる方であるかについての最も有力な証拠は、旧約聖書の預言を新約聖書の歴史におけるその成就と比較するときに見いだされる。ダニエル書と黙示録の関係についても同様である。

ヨハネの黙示録において、聖書のすべての書は出会い、完結する。ここでダニエル書は補完される。一方は預言、他方は啓示である。使徒行伝、585。

「complement」という語は、完成へと至らせることを意味する。旧約聖書の預言の成就は、キリストの「神性」に対する「最も強力な」「証拠」であった。ダニエル書の預言の神性についての最も強力な証拠は、黙示録において示されているとおり、それらの預言が成就したという事実である。ダニエル書の預言は黙示録で引き続き語られ、イエス・キリストの黙示の封印が解かれる終わりの日に、それらは完成へと至る。

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。」Manuscript Releases, 第9巻, 8。

ユダの王エホヤキムの治世三年に、バビロンの王ネブカドネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。ダニエル書 1:1

ダニエル書1章1節は、正しく考察すれば、豊富な預言的情報を含んでいます。考察はエホヤキムから始めます。

ヨヤキムは、ユダの最後の三人の王の最初の王であった。そのため、彼は第一の天使のメッセージを表している。彼の子で、エコニヤまたはコニヤとも呼ばれたヨヤキンは、第二の天使のメッセージを表した。ヨヤキンに続いたのは、ユダの最後の三人の王のうちの最後であるゼデキヤである。ゼデキヤは第三の天使のメッセージを表している。ヨヤキムが第一の天使のメッセージの象徴であることを支持する預言的な証言がいくつかある。これらの証拠を理解することは重要である。というのも、それによって『ダニエル書』1章1節が第一の天使のメッセージを指していることが示され、その事実が錨となって、第1章全体を『黙示録』14章の第一の天使のメッセージとして理解することができるようになるからである。まず、『歴代誌下』から始める。

剣を免れた者たちを彼はバビロンへ捕らえて連れて行き、彼らはペルシアの王国の治世に至るまで、彼とその子らに仕えるしもべとなった。これは、主がエレミヤの口を通して語られた言葉が成就するためであり、地がその安息を享受するまで、地は荒れ果てている間ずっと安息を守り、七十年を満たした。歴代誌下 36:20、21。

七十年にわたるバビロンでの捕囚は、地がレビ記二十五章に従って守られてこなかった安息を享受できるようにするためのものだった。七十年分の安息は、古代イスラエルがレビ記二十五章の規定を無視してきた四百九十年に相当する。四百九十年にわたる背きが、七十年の捕囚に先立った。四百九十年の終わりに、三人の王がネブカドネザルによって従属下に置かれることになった。

捕囚の七十年が満ちたとき、主はキュロスを起こされた。彼は、イスラエルが帰還しエルサレムを再建できるように勅令を出す三人の王の最初の者であった。アルタシャスタはその三人の三番目で、紀元前457年に第三の勅令を出した。第三の勅令によって、ダニエル書八章十四節の二千三百年が始まった。1798年に、憤りの第一の終わりが来て、ダニエル書の封印が解かれ、第一の天使が現れた。第三の天使は1844年10月22日に現れた。

ユダの最後の三人の王は皆、ネブカドネザルに直面し、エホヤキムが捕囚となった時に、その七十年が始まった。それはバビロンが滅ぼされるまで続き、バビロンを滅ぼし、ほどなく王となった将軍（キュロス）が、三つの勅令のうち最初のを発した。第三の勅令によって「夕と朝」の預言が始まり、それは三人の天使のうち第三の天使の到来によって終わった。キリストはいつも終わりを初めと結びつけておられる。

七十年の始まりは、ネブカドネツアルによるエルサレムへの最初の攻撃によって画された。七十年の終わりは、バビロンの滅亡によって画された。ネブカドネツアルの攻撃を受けた三人の王のうち、三番目の王の時代に、エルサレムの最終的かつ完全な破壊がもたらされた。エルサレムの破壊は段階的であった。最後の三人の王は、いずれもネブカドネツアルの攻撃を受けたという点で、一つの預言的象徴を表している。彼らは、一つの象徴を成していた三つの勅令を予表しており、二千三百日の終わりにおける三人の天使も同様に一つの象徴であった。

「エズラ記第七章にその勅令が見いだされる。12-26節である。その最も完全な形において、それはペルシアの王アルタクセルクセスによって、紀元前457年に発せられた。しかしエズラ記6:14には、エルサレムにおける主の家が『クロス、ダリヨス、およびペルシアの王アルタクセルクセスの命令〔欄外注「勅令」〕によって』建てられたと述べられている。これら三人の王は、その勅令を起草し、再確認し、完成させることによって、2300年の始まりを示すために預言が要求していた完全な形へとそれを至らせた。紀元前457年、すなわちその勅令が完成した時をその命令の年代として採るならば、七十週に関する預言のあらゆる細目が成就していたことが明らかとなった。」『各時代の争闘』326ページ。

ホワイト姉妹は、三つの勅令が預言を完成させるために必要であったと指摘している。彼女はそれらの相互関係を定義し、その際にヘブライ語の「真理」という語の文法的特徴を明らかにしている。彼女は、第一の勅令が起点となり、第二の勅令が再確認し、第三の勅令が「七十週に関する預言のすべての要件」を完成させたと言う。ヘブライ語の「真理」という語は、ヘブライ文字の第一、十三、そして最後の文字の組み合わせによって成り立っている。第一の勅令が起点となり、第二が再確認し、最後の勅令がその預言を完成させた。三つの勅令にはアルファとオメガの署名が含まれており、第三の勅令が七十年の終了からかなり後に到来したにもかかわらず、バビロンでの捕囚に関する七十年の預言の終わりにそれらは成就した。三つの勅令は漸進的であり、三つの勅令でありながら、それでもなお一つの預言的象徴であった。

1798年に第一の天使が現れ、1844年の春に第二の天使が現れ、1844年10月22日に第三の天使が現れた。これら三人の天使は一つの預言的象徴であり、ヨハネの黙示録第14章の永遠の福音を表している。

「第一と第二のメッセージは1843年と1844年に与えられ、私たちは今や第三のメッセージの宣布のもとにある。しかし、三つすべてのメッセージは今なお宣べ伝えられなければならない。真理を求める人々にそれらが繰り返し語られることは、今もかつてと同様に不可欠である。私たちは筆と言葉をもって、その順序と、私たちを第三天使のメッセージへと導く預言の適用を示しつつ、その宣言を響かせねばならない。第一と第二なしに第三はありえない。出版物や説教において、預言的歴史の流れの中で、すでに起こった事柄とこれから起こる事柄を示しながら、これらのメッセージを世界に与えるのである。」『選ばれたメッセージ』第2巻、104、105頁。

ユダの最後の三人の王は一つの象徴であった。というのも、彼らは皆、バビロンの王によって程度の差こそあれ服属させられたからである。ユダの最後の三人の王、三つの勅令、そして三人の天使は、それぞれ別個の三つでありながら、一つの預言的象徴としても表されている。

最後の三人の王は、七十年の捕囚に関する預言の始まりにおける預言的背景の一部であり、したがって、七十年の捕囚の終わりを描き出すための始まりの一部ともなる。捕囚は、三人の王が段階的に従属させられていくことから始まり、王国とその首都の滅亡に至った。預言の終わりは、バビロンという国家とその首都の滅亡を指し示し、その滅亡は三つの段階的な勅令の到来を画する。二千三百年の預言の始まりは三つの段階的な勅令によって画されており、その始まりは、三つの段階的なメッセージから成る二千三百年の

預言の終わりを描き出している。

三人の天使と彼らの三つのメッセージは、三人の王とその段階的な三つの勅令によって予表されていた。それぞれの勅令を布告したその三人の王は、さらに、ネブカドネザルに対する反逆のメッセージをそれぞれ掲げた、順次現れた三人の王によって予表されていた。三つの反逆のメッセージが三つの勅令を予表し、その勅令がさらに三つのメッセージを予表していた。そのうちの一つは七十年の預言を開始し、その預言は二千三百年の預言の開始によって終わり、二千三百年の預言は1844年に第三の天使の到来によって終結する。地がその安息を享受するはずであった七十年は、1844年10月22日と切り離して考えることはできない。

エホヤキムは、キュロスの第一の勅令を、また黙示録14章の第一天使のメッセージを表している。さらに、ユダの最後の三人の王、三つの勅令、そして三天使のメッセージという三つの証人は、エホヤキムの象徴に関する正確な情報を与える。というのも、三天使に関する預言史は、靈感によって非常に注意深く印されているからである。三つのメッセージはいずれも、歴史的な到来があり、その後に歴史的な力づけがある。

第一の天使は1798年に到来し、1840年8月11日に、一日を一年とする原則が確認されたことにより力を得た。

「1840年には、予言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ。その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を発表し、オスマン帝国の没落を予告した。彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される。そのとき、コンスタンティノーブルにおけるオスマンの権勢は打ち砕かれると見込まれる。そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう。』」

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

1798年に裁きの開始を告げる第一の天使が到来したが、そのメッセージは、聖書の預言における一日が一年を表すというウィリアム・ミラーの解釈の妥当性を前提としていた。その原則は「1840年8月11日」に確認され、第一のメッセージは強められた。聖書暦の1843年（それは1844年にまで及んだ）におけるキリストの再臨の予告が失敗に終わると、黙示録14章の第二の天使が到来した。1844年春の予告が失敗に終わると、プロテスタント諸教会はミラーの「一日を一年とする」原則を退け、バビロンの娘たちとなった。そのメッセージはその後、真夜中の叫びのメッセージが加わった1844年の夏に強められた。1844年10月22日に真夜中の叫びのメッセージが成就すると、第三の天使がそのメッセージを携えて到来した。

1863年のラオデキヤ的アドベンティズムの不従順のゆえに、神の民は古代イスラエルの荒野での放浪の歴史を繰り返すように定められた。第三のメッセージの力づけが行われる

のは、2001年9月11日まで待たねばならなかった。三つのメッセージはそれぞれ歴史の中に到来し、その後にかづけられる。

ヨヤキムとキュロスは、第一の天使の到来ではなく、そのかづけを表している。ヨヤキムはユダの最後の三人の王の最初の王であり、また彼は第一の天使のメッセージを表しているが、彼とキュロスが示す預言的特徴は、彼らがいずれも第一の天使の到来の象徴ではなく、第一の天使のかづけの象徴であることを示している。ヨヤキムの歴史における第一のメッセージの到来は、ユダの最後の七人の王の最初の王であるマナセであった。

エルサレムの完全かつ最終的な滅亡に先立って、七人の王がいた。これらの七人の王は、1798年から1844年にかけて彼らが予表した歴史がそうであったように、段階的に進む歴史を表している。第一の天使は1798年に到来し、第三の天使は1844年10月22日に到来した。1798年から1844年までの歴史は、第一と第二の天使の歴史である。第三の天使の歴史は1844年に始まった。ホワイト姉妹が黙示録第十章の七つの雷の象徴の意味を明らかにするとき、彼女は、その七つの雷は第一と第二の天使の歴史を表しており、第三の天使の歴史ではないと言っている。

七つの雷鳴において表現されたヨハネに与えられた特別な光は、第一と第二の天使のメッセージのもとで起こる一連の出来事の概略であった。『セブンスデー・アドベント聖書注解』第7巻、971頁。

黙示録第10章の七つの雷の歴史は、1840年8月11日に第一の天使が勢いを得てから、1844年10月22日の大失望に至る歴史を強調しているが、それでもなお、第一と第二の天使の歴史全体を含んでいる。七つの雷の一般的な適用は、1798年から1844年10月22日までを表しているということである。1798年から大失望に至る第一の天使の到来の歴史は、第一と第二の天使の歴史であり、預言的には七つの雷として示されている。七つの雷はまた、ユダの最後の七人の王によっても型取られている。これらのうち最後の三人の王は、単に連続する王を指し示すだけではなく、初め・中間・終わりから成る一つの象徴を形作っている。

三天使の歴史において、第一のメッセージは1840年8月11日に勢いを得、エホヤキムとキュロスはともにその出来事を予表していた。

次の記事でも、こうした最も重要な真実を引き続き明らかにしていきます。

学ぶ者は皆、厳格な誠実を大切にすべきである。すべての心は、敬虔な心をもって、啓示された神のことばに向けられるべきである。こうして神に従う者には、光と恵みが与えられる。彼らは主の律法のうちから驚くべきことを目にするだろう。五旬節の日以来、顧みられず見えずにいた大いなる真理が、神のことばから本来の純粹さをもって輝き出ることになる。まことに神を愛する者には、聖霊が、記憶から薄れていた真理を明らかにし、さらにまったく新しい真理をも啓示してくださる。神の御子の肉を食べ、その血を飲む者は、ダニエル書と黙示録から、聖霊に靈感された真理を引き出すだろう。彼らは抑えがたい力を呼び起こす。子どもたちの唇が開かれ、人の思いから隠されてきた奥義を宣べ伝える。主はこの世の愚かなものを選んで賢い者はずかしめ、またこの世の弱いものを選んで強い者はずかしめられる。

聖書を、私たちの学校に不信仰のあいだに挟み込むために持ち込むべきではない。聖書は教育の土台とし、その内容そのものとしなければならない。確かに、私たちは過去よりも生ける神の御言葉についてはるかに多くを知っているが、なお学ぶべきことはさらに多い。聖書は生ける神の御言葉として用いられ、あらゆることにおいて第一に、最後に、そして最良のものとして重んじられるべきである。そうしてこそ、真の霊的成長が見られるようになる。生徒たちは、神の御子の肉を食べ、その血を飲むので、健全な宗教的品性を培うようになる。しかし、見守り養わなければ、魂の健康は衰える。光の流れの中にとどまりなさい。聖書を学びなさい。忠実に神に仕える者は祝福される。忠実な働きを決して報いなしにはおられないお方は、忠誠と誠実のあらゆる行為に、ご自身の愛とご是認の特別なしるしをもって冠を授ける。Review and Herald, 1897年8月17日。